

# 「行く船の過ぎて来べしや」

——人麻呂歌集七夕歌一九九八番歌の解釈——

大浦誠士

## 一 一九九八番歌訓釈史の検討

万葉集卷十の「秋雑歌」部の冒頭には、「七夕」の標目のもとに短歌九三首、長歌二首とそれに付随する反歌三首の、合計九八首の七夕歌が載せられている。その「七夕」歌群の前半部には、「右柿本朝臣人麻呂之歌集出」という左注によって括られた三八首の七夕歌が載せられている。その冒頭から三首目に載せられるのが次の歌である。

吾恋 孀者知遠 往船乃 過而応来哉 事毛告火 (⑩一九九八)

この歌は近年の注釈書では

アガコヒヲ ツマハシレルヲ ユクフネノ スギテクベシヤ コトモツゲナム

と訓むことではほぼ一致している。そしてその解釈をごく最近の注釈書類に見ると、

○『新編全集』

訳 わたしの恋を 夫は知っているのに 行く舟が 通り過ぎてよいものか 何か一言言ってほしかったのに

頭注 行く舟は彦星の乗った舟。それが接岸しようとして行き過ぎたことを、わざとじらしたのでしようと、とが

めた趣。

○『釈注』

訳 私のつらい思いをあの方は百も承知のはずなのに、沖を行く舟のように、ここに立ち寄りもしないで行ってし

まうなんていうことがあってよいものでしょうか。せめて言伝てだけでもしてほしい。

○『新大系』

訳 私の恋を夫は知っているのに、行く舟が通り過ぎてよいものでしょうか。せめて一言でも言伝てを伝えてほし

い。

○『全注』

訳 私の恋を、夫はよく知っているのに、行く舟のように通り過ぎて行ってしまふところがあるでしょうか。

せめて伝言だけでも託してほしいものです。

考 ここも彦星が素通りしてしまったのを、織女が恨んだ歌と見てよいと思う。

などに見られるように、牽牛の乗る舟が言伝もなく通り過ぎていったことを恨む織女の立場での歌とする解釈が定着しつつあるようである。しかし、私見では一九九八番歌をそのように解しうるか、疑問に思うところがあるゆえ、

少々検討を行ってみたい。

まず、一九九八番歌の訓釈史を辿っておこう。

諸本の漢字本文の異同としては、第二句「知」字について京大本が頭書に赅で「弥イ本」と記す他は、目立った異同は見られない。『略解』が「弥」字によって第二句をツマハイヤトホクと訓むが、諸本の状況から見て、「知」字によってツマハシレルヲと訓むのが適当である。「子嶋羽見遠」(①一二二 一二五)をこしまはみしをはじめとして、「遠」は助詞ヲの表記としても現れる。

訓については、第二句「孀者」を諸本イモハと訓む中で、紀州本にはツマハとあり、細井本、神宮文庫本も左にツマハと記す。元暦校本がツコハとするのも、ツマハの誤りであろう。頭書に「弥イ本」と記す京大本はその右にイヤトヲと記している。第四句「過而」は、細井本、神宮文庫本にコキテの異訓を記す他はスキテで異同はない。結句の「告火」は、細井本、神宮文庫本にツケラシ、元暦校本、紀州本、京大本赅がツケヒとする他は、ツケラヒと訓まれている。

近世の注釈書では、初句「吾恋」を『略解』がワカコフルと訓み、第二句ツマの修飾句とする他は、ワガコヒヲと訓じている。第二句「孀者」は『代匠記』精撰本が紀州本のツマハの訓を採用して以来、ツマハの訓が定着した。万葉集中の「孀」字の用法から見て、ツマハの訓が正しいだろう。結句「告火」は『童蒙抄』に「此火の字いかに読まんか」と言うように古来難訓であり、『童蒙抄』は「火」を「哭」の誤りとしてツゲナクと訓む宗師説を引用し、『古義』も「火」を「无」か「哭」の誤りとしてツゲナクと訓む他、『万葉考』は「哭」字説をとってノラナクと訓むが、『訓義辯證』が「二二シ火四ナム吾妹」(⑬三一九八)の例によって「按に火は南の意に借たるにてツゲナムと訓べきなり」とするのを引き、井上『新考』がツゲナムの訓を採用して以来、ツゲナムの訓が定着した。

初句「吾恋」を『略解』ではワガコフルと訓み、第二句をツマハイヤトホクと訓んでいるが、第二句をツマハシレ

ルヲと訓むべきことは先述の通りである。「我が恋ふる嬢は知れるを」とした場合には、「嬢は」を主格と見ると嬢が何を知っているのか不明であり、「嬢は」をヲ格と見ても誰が嬢を知っているのかわかりにくい。やはり旧訓通りワガコヒヲと訓むのが適当であろう。

したがって一九九八番歌は、冒頭に示した原文によって、近年の注釈書が採用する訓により、

我が恋を嬢ぢやうは知れるを行く船の過ぎて来こべしことや言ことも告げなむ

と訓み下すのが穩当のようである。

原文に比較的問題がなく、訓についてもおよそ定訓を得ている一九九八番歌であるが、その解釈については、古来様々な説が提出されている。

『代匠記』初稿本は、彦星の立場での歌と見て、「我恋る人のほとを、たなはたつめは、兼てしれるを、こきゆく舟のひとたひ過ては、年のうちにまたくへきものか。言の葉をも告おこせよといふなり」と言い、精選本では第二句をツマハと改めて織女の立場とした上で、「我方ニ（榜）渡り来ム船ノ、明ヌトテ榜行テ過ナム後又コギ来ヘンヤ」とする。牽牛・織女の立場には揺れがあるものの、七月八日の後朝の別れの後は来年まで逢えないことを歌っていると見るとは一貫しており、いわば後朝説と言えよう。

『童蒙抄』は、「彦星の歌にて、わが恋わぶる心は、織女の知れる事なれば、こぎ行船は過ぐるの序詞にて、一度逢事過ぎて、年の内に又逢ふべきにや、言の葉をもつげよの義也」と、『代匠記』が実意ある語としていた「行く船の」を枕詞と見る点は異なるが、後朝説の立場をとっている。そしてその一方で、「我恋心を知りながら、時過ぎて来べき事かは、わが恋ふる事も既に告げたるにと云ふ意と也」とする一説と、「わが恋を妹は知れるをかく過ぎ行て、又来べきや、来るまじ。されば来べき共ことを告げなくと云意にて、（後略）」という宗師説を並記している。一説として

載せられるのは「過ぎて」を「時過ぎて」の意と解する、いわば遅延説であり、宗師説は、解釈がやや不鮮明だが、「過ぎ」を「過ぎ行て」とする通過説の萌芽と言えようか。

以後の注釈で後朝説を明確に主張するのは『万葉考』であり、「往船乃」を「別れの時をいふなるへし」とし、「過而応来哉」に「来ん年ならては来べきやなり」とあって、七月八日の別れに際しての彦星の立場の歌と見ている。

『古義』は、

歌意、中山巖水、第一二の句はアガコヒヲツマハシレルヲと訓べし、嬌は彦星を云、往船とは、たゞ天漢を漕行舟にて、彦星の舟にあらず、過而は、時過而の意なり、わが待つゝ恋ることを、彦星はよく知給ひぬるを、舟の過往ごとく時過て来ますべしやは、もし時過むとならば、事のよしを告来すべきに、しかくと言もつげ来ずてあれば、時過て今更座べきやうはなしといへるにて、かのこぎ行舟を見て、彦星の来り給ふにやと、つきそふ女どものいふに、こたふるさまなりといへり、今按に此説の如くならば、往船之は、たゞ天漢の縁に、枕詞の如くに云るものとすべきか、なほ考ふべし、

と「往船乃」の解は保留しつつも、「過ぎて来」を「時過」きて来る意と明確に述べ、織女の立場で彦星の船が時が過ぎて来ないことに対する恨み言を歌っているという中山巖水の言を引用して、遅延説による解を示している。

近世の注釈類においては、後朝説が主流を占め、遅延説が并存する状況にあり、後に通説化してゆく通過説はほとんど見られない状況にあった。

近代に入って通過説を明確に打ち出したのは井上『新考』であった。

此歌は織女になりてよめるにて

ワガカク恋フル事ヲ彦星ハヨク知レルヲ今天ノ河ヲ舟ニテユクトナラバ伝言ダニスベキヲ素通りニシテ往クベ

といへるなり

と、牽牛が織女の前を「素通り」して行くと明確に述べて通過説をとり、以後、『全釈』『古典大系』『全註釈』『私注』（第二句をツマハシルキヲと訓む）『古典全集』『古典集成』などに、牽牛の立場か織女の立場かという揺れは残しつつも、ほぼ通説と化したかのように採用されるに至った。

ただ、通過説を採る場合、何故牽牛の船が織女のもとを素通りしてゆくのかという素朴な疑問が生じるのだが、その点に一定の説明を与えようとしたのが窪田『評釈』である。

この歌は、牽牛が織女と共寝することを許されてゐるのは、七月七日の一夜のみであるが、平常、天の河に船を漕ぐことは自由であつたと解して、その上に立つてのものである。かう解さないとわからない歌である。（傍線筆者）

牽牛と織女との逢会が許されているのは七月七日のみであるが、その他の日にも牽牛が船に乗って天の川を航行すること自体は許されていたと見るわけである。確かに牽牛が織女のもとを素通りしてしまう状況は七月七日の夜の事態としては理解しがたく、通過説を採る限り、窪田『評釈』の言うような状況を想定しなければ、「わからない歌」となる。しかし、一年に七月七日のみ逢うことが許された七夕伝説において、平常自由に天の川を航行することが許されていたとする想定は、やはり不自然の感を否めない。

この通過説の持つ不自然さに、全く別の方向から解決を与えようとしたのは澤瀉『注釈』である。『注釈』は、「それでは船が岸に添うて素通りしてしまふやうになり、七夕の歌としては得心がゆかない事になる」と言い、「この作と次の作とは七夕の作ではないのを、（中略）『行く船の』を枕詞と考へずに七夕の歌に入れたと見るべきである」と言

い、

あからひく色妙し子を数見れば人妻ゆるゑに我恋ひぬべし（⑩一九九九）

とともに、七夕歌ではないとして、恋人が言伝もなく家の前を通り過ぎてゆくことを恨んだ通常の相聞歌と見ること  
によって、先述の不自然さを解決するのである。一九九九番歌の七夕歌としての質については、かつて論じたことも  
あり、『注釈』の言うように二首を七夕歌ではないと見ることはできないが、牽牛の乗る船が織女のもとを素通りす  
るといふ設定に対する『注釈』の素朴な疑問は見逃せないであろう。

近代以降、通過説がほぼ通説化する中で、佐佐木『評釈』は、「私が恋しがつてゐることを、夫の彦星は知つて居ら  
れるのに、こんな時過ぎていらつしやるべきでありませうか。おくれるならば言伝でもしていただきたいもので  
す」と釈し、遅延説による解釈を示している。

以上見てきたように、近世には必ずしも明確に現れていなかった通過説が、恐らく井上『新考』を契機として一氣  
に通説化してゆき、以後はその説の持つ問題点の彌縫が行われてきた——『新編全集』が「わざとじらした」とする  
のも彌縫の一種である——のである。しかし、牽牛の通過には、先述のように疑問が持たれる他、通過説による場  
合、しばしば「来」が「行く」と解されることにも疑問があり、はたして通過説でよいのか、検討する必要がある。

## 二 使者としての「月人壮士」想定可否

一九九八番歌の訓釈史を辿ってきたが、ここでもう一つ触れておかなければならない解釈がある。渡瀬昌忠の一連  
の論考が示す解である。渡瀬による一連の論考は、人麻呂歌集七夕歌に牽牛の使者としての「月人壮士」を想定し、

人麻呂歌集七夕歌第一部(⑩一九九六〜二〇二六)の七夕以前の歌(⑩一九九六〜二〇二三)——一九九六〜二〇一三番歌の全体を七夕以前の歌とするのは渡瀬論の独自の把握であるが、問題のあることは後述する——に、牽牛と「月人壮士」との問答を読み取るうとする。その場合一九九八番歌は、黄道上を旅する「月人壮士」が織女の伝言を受け取ることなく素通りして牽牛のもとに来たことに対して、牽牛の立場で「私の恋しい思いを妻(織女)は知っているのに、月人壮士が織女のもとを素通りして来てよかろうか。せめて言伝だけでもしてほしい」と歌っていることになり、「来」を「行く」と解する不自然さと、七夕以前に牽牛が船に乗って天の川を自由に航行するという不自然さは解消される。この渡瀬の解は、近年の注釈書では『和歌文学大系』が採用している。

しかし、渡瀬論の解によった場合にも、やはり不自然さは残る。渡瀬論の解によれば、一九九八番歌は、自分の恋心を知っているにもかかわらず伝言をしてくれない織女への不満を歌った歌となるのだが、「べしや」の語法を持つ非難の矛先は、直接には「月人壮士」の「行く船」が「過ぎて来」たことに対して向けられており、「我が恋を婦は知れるを・言も告げなむ」という織女への不満と、「行く船の過ぎて来べしや」という「月人壮士」への非難との間に分裂を生じてしまうのである。

さらに、より根本的な疑問も存する。人麻呂歌集七夕歌の、特に七夕以前の歌に、使者としての「月人壮士」を想定することの可否と、歌群が牽牛と「月人壮士」との問答によって進行するという配列論の可否である。渡瀬論においては、人麻呂歌集七夕歌の冒頭から一八首が牽牛と「月人壮士」との問答とされるのであるが、「月人壮士」という語が登場するのは冒頭から一五首目の

夕星も通ふ天道をいつまでか仰ぎて待たむ月人壮士(⑩二〇一〇)

においてであり、それまでの十四首には「月人壮士」を連想させる表現は見られない。先行論にしばしば論じられて



きたように、人麻呂歌集七夕歌は和歌世界において中国伝来の七夕伝説を歌う最初の試みであり、したがって、「月人壮士」を牽牛の使者とみなすような和歌世界での共通認識の存在しない環境での詠作なのであり、「月人壮士」の語を伴わずに冒頭からの一四首を牽牛と「月人壮士」との間答を構成することは不可能であると考えられる。確かに冒頭からの歌には、当該歌の「言も告げなむ」をはじめとして、「妹に告げこそ」(⑩二〇〇〇)、「言だにも告げにぞ来つる」(⑩二〇〇六)、「妹が伝へは早く告げこそ」(⑩二〇〇八)など、使者を介しての言伝を求める歌が散見されるが、その使者を「月人壮士」に特定できる表現は見あたらない。これらの表現は、人麻呂歌集七夕歌が相聞歌の環境の中になされた結果、離れて逢えぬ状況においてせめて言伝だけでも求める相聞的な発想が生み出したものと見るべきである。

ひさかたの天の川原にぬえ鳥のうら嘆けましつ乏しきまでに(⑩一九九七)

あからひく色妙し子を数見れば人妻ゆゑに我恋ひぬべし(⑩一九九九)

汝が恋ふる妹の命は飽き足らに袖振る見えつ雲隠るまで(⑩二〇〇九)

など、歌の主体が織女を間近に見ているかのような歌についても、その主体を「月人壮士」に特定する表現は見られず、品田悦一「人麻呂作品における主体の獲得」が述べるように、人麻呂歌集七夕歌の主体は、伝説内部にその都度設定されていると捉えるのが正当であろう。

以上のように使者としての「月人壮士」の想定を取り払って見ると、牽牛と使者とのやり取りを歌うように見える歌も、その二者の関係は一首内部において相聞歌の方法によってその都度設定される関係となり、歌群全体を覆う設定ではなくなる。渡瀬論は「月人壮士」の想定によって歌群に連作性を見出し、それを演繹的に歌の読みに戻してゆくという方法に則っているのだが、使者としての「月人壮士」の想定が、歌の具体的な読みからは導かれない以上、

その方法は論理循環とならざるを得ない。したがって、先述した表現の分裂ゆえに、採用しがたい読みと言えらるう。

### 三 後朝説・通過説の問題点

三説の中では最も早くから見られるのが後朝説であるが、「過ぎて」を「牽牛の船が過ぎ行きて」と解すにしろ、「二人の逢事が過ぎて」と解すにしろ、来年まで訪れないことを言う「来べしや」との間に、解釈上のハナレを持つこととなる。「過ぎて来べしや」という一句を、「過ぎて一來べしや」と分割して解釈するのは、やはり不自然である。さらに後朝説の疑問点は、上二句の「我が恋を嬌は知れるを」と「過ぎて来べしや」との関係にもある。後朝説を採ると、助詞「を」を順接と解しても逆接と解しても、「我が恋を嬌は知れるを」を「過ぎて来べしや」と関わらせることができなくなる。七月七日の逢瀬が終わって翌年まで逢えないことは、七夕伝説の枠組みゆえであって、相手が「我が恋」を知っているか否かとは関わらないからである。したがって後朝説をとる場合は、「我が恋を嬌は知れるを」は、助詞「を」を順接と解して結句「言も告げなむ」に係ることになる。その場合、文構成上「行く船の過ぎて来べしや」は挿入句となるのだが、「べしや」という語法の持つ主張の強さは、これを挿入句と取ることを許さないだろう。やはり「我が恋を嬌は知れるを」は直下の「行く船の過ぎて来べしや」に係ると見て、「我が恋」を「嬌」が知っているにもかかわらず、「過ぎて来」ることを非難していると見るべきである。

通過説を採る解釈に、牽牛の立場とする解と織女の立場とする解とが見られることは先述したが、船が通過することに対して「べしや」と非難する文脈は織女の立場を思わせるにもかかわらず、牽牛の立場と見る解があるのは、織

女の立場ならば当然「過ぎて行くべしや」となるべきところが「過ぎて来べしや」とあることによる。「来」の不自然さを、牽牛の立場で織女のもとを素通りしなければならぬ自分の行為を客観視して、あるいは船を操る水夫たちに向かつて、「過ぎて来てよかろうか」と歌うと見ることによって回避するのである。しかし、そのように見た場合には、上二句の「我が恋を嬌は知れるを」の理解に無理が生じてしまう。牽牛の立場を考える場合、「我」は牽牛となり、「嬌」は織女となるのだが、そうすると「私（＝牽牛）の恋心を妻（＝織女星）は知っているのに」という内容と、自らが通過してきたことに対する「過ぎて来べしや」という非難との間に齟齬を生じてしまうのである。恋心を知っている主体である「嬌」と「過ぎて来」の主体とが一致していなければ、助詞「を」が生きてこない。

織女の立場として通過説で理解しようとする場合、「来」の不自然さは、「来」を「行く」の意で解するか、「来」を牽牛の側に視点を置いての語と見るかによって回避することになるのだが、その際、注釈書が傍証として挙げるのが次の歌である。

太上天皇、幸于吉野宮時、高市連黑人作歌

大和には鳴きてか来らむ呼子鳥象きさの中山呼びそ越ゆなる（①七〇）

大和には鳴きてか来らむほととぎす汝が鳴くごときさに亡き人思ほゆ（⑩一九五六）

七〇番歌は、太上天皇（＝持統）が吉野宮に行幸した時の高市黑人の歌であり、一九五六番歌は、「大和には鳴きてか来らむ」の共通から見て、黑人歌に倣って作られた歌であろうと考えられる。黑人歌は吉野に身を置いて、「象の中山」を大和に向かつて鳴きながら飛び越えてゆく「呼子鳥」が歌われており、それを「鳴きてか来らむ」と表現していることから、「来」に「行く」の意があるとされるのである。しかし、右の歌の「大和には鳴きてか来らむ」は、助動詞「らむ」によって大和の側の状況を推量して歌うのであり、決して「来」が「行く」の意で用いられているのでは

ない。『全注』は右の歌を論拠として「過ぎて来」を織女の立場から牽牛の側に視点を置いての表現と見るのだが、右の歌では「大和には……らむ」と、大和の側に視点を置いての推量であることが明示されるのであり、そうした表現を全く伴わない一九九八番歌の「過ぎて来」を牽牛の側に視点を置いての表現と捉えることには無理があるだろう。一九九八番歌を牽牛の立場とすることも、「来」を「行ク」と解することも、通過説の持つ問題点の彌縫策と見られ、しかもあまり成功しているとは言えないのである。

#### 四 「過ぎて」の理解

『時代別国語辞典 上代編』は、「過ぐ」の意味を

ある一点をはさんで、その一方の側から他の側へ移動する意を示す。空間的にも時間的にも用いる。

と説明し、

- ① 通過する。寄らずに通り返る。
- ② 時間がたつ。経過する。
- ③ 時期はずれになる。
- ④ 消えてなくなる。
- ⑤ 超過する。

という五つの意味・用法を掲げている。この分類で言えば、先に検討した後朝説は「過ぎて」を④の意で、通過説は①の意で取るものである。万葉集中の「過ぐ」の用例を見ると、確かに①の通過の意はやはり用例が多く見られるが、

季節歌等において、花の時期や紅葉の時期が過ぎたことを言う例も多く見られ、

雲隠り雁鳴く時は秋山の黄葉片待つ時は過ぐれど (⑦一七〇三)

桜花時は過ぎねど見る人の恋ふる盛りと今し散るらむ (⑩一八五五)

秋萩の下葉の黄葉花に継ぎ時過ぎゆかば後恋ひむかも (⑩二二〇九)

橋を守部の里の門田早稲刈る時過ぎぬ来じとすらしも (⑩二二五一)

信濃なる須我の荒野に霍公鳥鳴く声聞けば時過ぎにけり (⑭三三五二)

遅速も君をし待たむ向つ峰の椎のさ枝の時は過ぐとも (⑭三四九三 或本)

離れ磯に立てるむろの木うたがたも久しき時を過ぎにけるかも (⑮三六〇〇)

のように、「時」の語を伴って用いられる例も多く拾うことができる。また、

妻もあらば摘みて食べまし作美の山野の上のうはぎ過ぎにけらずや (②二二二)

のように、「過ぐ」のみで適した時期を過ぎたことを言う例も見られる。⑤の超過の意も、

我が行きは七日は過ぎじ龍田彦ゆめこの花を風に散らし (⑨一七四八)

…近くあらば いま二日だみ 遠くあらば 七日のをちは 過ぎめやも… (⑭四〇一一)

に見られるように、時間的意味で超過を言う例である。動詞「過ぎ」においては、空間的な通過とともに、時間的な経過も主要な意味であったことが確認できる。

自動詞「過ぐ」に対する他動詞「過ぐす」に、「すこす。好機の過ぎ去るにまかせ。機会をとり逃がす」(『時代別』)という意味があることも注意される。

…よち子らと 手携はりて 遊びけむ 時の盛りを 留みかね 過ぐしやりつれ… (⑤八〇四)

秋の野に露負へる萩を手折らずであたら盛りを過ぐしてむとは(20四三二八)

などがその例であり、いずれも「盛り」の時を過ぎ去るにまかせてしまった後悔が歌われている。

こうした「過ぐ」「過ぐす」の例を参照すると、一九九八番歌の「過ぎて来」は、牽牛が逢会に最も適した時を過ぎて来たことを言うと言解することは十分可能であろう。「過ぎて来」を『古義』、佐佐木『評釈』のように牽牛が遅れて来ることを言うと言解した場合には、「我が恋を婦は知れるを」は織女の立場で牽牛は自分の恋しい思いを知っているはずなのにと、助詞「を」を逆接のニュアンスで解することができ、「言も告げなむ」も、遅れてくるのならば予め言伝だけでも告げてほしいと言解することができる。一首の文脈が非常に自然なものとして理解できる。

人麻呂歌集七夕歌には、

夕星も通ふ天道をいつまでか仰ぎて待たむ月人壮士(10二〇一〇)

という歌が見られる。歌の立場については、牽牛・織女、さらには第三者、いずれの立場であるかには注釈書によって揺れが見られるが、七月七日の夜なのに何時になったら逢瀬の時が来るのかと「月人壮士」に尋ねる形で待ち遠しい思いが歌われている。

天の川去年の渡りで移ろへば川瀬を踏むに夜そ更けにける(10二〇一八)

は待ち遠しさを歌う歌ではないが、物語的な展開が比較的色彩濃く読み取れる部分の歌であることから言えば、前歌の、恋しくは日長きものを今だにも乏しむべしや逢ふべき夜だに(10二〇一七)

において織女が七夕の夜に自分をじらす牽牛に恨み言を言ったのに対して、牽牛の立場から、天の川の去年の渡り場所が変わっていたので、渡れるところを探しているうちに夜が更けてしまったのですよと遅れて来たことの言い訳をしている趣の歌と見られる。出典不明七夕歌に目を移すと、

恋しけく日長きものを逢ふべかる夜だに君が来まさざるらむ (10二〇三九)

しばしばも相見ぬ君を天の川船出早せよ夜の更けぬ間に (10二〇四二)

渡り守船渡せをと呼ぶ声のいたらねばかも楫の音のせぬ (10二〇七二)

渡り守船早渡せ一年に二度通ふ君にあらなくに (10二〇七七)

恋ふる日は日長きものを今夜だに乏しむべしや逢ふべきものを (10二〇七九)

のように、七月七日の夜であるにもかかわらず、なかなか牽牛の船がやって来ないことにじれる織女の心情を歌う歌が散見され、七月七日の逢会の夜に牽牛の渡河が遅れるという状況設定は、七夕歌における一つの詠歌パターンとなっていたことが知れる。

ここで「過ぎて来」に上接する「行く船の」についても検討しておく必要がある。「過ぎて来」を時の経過の意とする場合、必然的に「行く船の」は「過ぎ」を導く枕詞となろう——「行く船の」を「来」の主語と見ると「行く」と「来」との間に齟齬が生じてしまう——が、「行く船の」は当該歌以外に、人麻呂石中死人歌に一例 (2二二〇)、松浦佐用姫の歌に二例 (5八七四、八七五)、人麻呂歌集「高市歌」に一例 (9一七二八)、遣新羅使の歌に一例 (15三六一二)、いずれも枕詞としての用法ではなく、実景としての「行く船」が歌われている。ただし、人麻呂歌集歌には、

行く川の過ぎにし人の手折らねばうらぶれ立てり三輪の松原は (7一一一九)

潮気立つ荒磯にはあれど行く水の過ぎにし妹が形見とぞ来し (9一七九七)

のように、「行く川の」「行く水の」が「過ぎ」の枕詞として用いられた例を見ることができ、当該歌においても七夕歌ゆえに「行く船の」が「過ぎ」の枕詞として用いられている可能性も否定できない。

渡瀬昌忠<sup>(6)</sup>は、「情なく雲の隠さふべしや」(①一七)、「百船の過ぎて往くべき浜ならなくに」(⑥一〇六六)の「雲の」「船の」が下件の主格となつてゐることを根拠として、「行く船の」を「過ぎて来べしや」の主格と考えるべきことが述べられてゐるが、前項までに検討したとおり、「来」をあくまで来ル意味でとり、しかも「過ぎて来」る主体を牽牛と見る立場に立つ場合は、「行く船の」と「過ぎて来」との齟齬は如何ともしがたく、そうした齟齬の見られない他の用例から「行く船の」を枕詞にあらざと結論づけることはできないものと考ええる。「行く船の」は七夕歌ゆえに選択された枕詞と見るべきであらう。

## 五 人麻呂歌集七夕歌の表現

検討の結果、近年の注釈類にはほとんど顧みられていない、『古義』、佐佐木『評釈』の遅延説が一九九八番歌の理解としては最も自然であることを述べてきたが、遅延説をとる場合にも、表現の不自然さは、やはりついて回る。動詞「過ぐ」には確かに「最も適した時を越える」意味を認めうるのであるが、万葉集の相聞歌において、恋の相手が遅れて来ることを歌う発想・表現が一般的ではないことである。万葉集に相聞の歌として載る歌には、

見渡せば近きわたりをたもとほり今か来ますと恋ひつつそ居る (⑪二三七九)

我が背子を今か今かと待ち居るに夜の更けぬれば嘆きつるかも (⑫二八六四)

秋萩の咲き散る野辺の夕露に濡れつつ来ませ夜は更けぬとも (⑩二二五二)

に見られるように、男の来訪を今か今かと待ち、夜が更けても来ないことを嘆き、あるいは夜が更けてでも男が来ることを願うなど、待つ女の心情を主題とする歌は多く見られるが、男の来訪が遅れたことに対する不満を歌う発想



は、一般的とは言えない。

時守の打ち鳴す鼓数み見れば時にはなりぬ逢はなくもあやし(⑩二六四一)

には、約束の時を過ぎてても男が来ないことが歌われるが、時守の鼓に寄せる歌ゆえであって、やはり男が来ないことを歌う相聞歌一般の発想の中にあると言えよう。男が逢会の時を過ぎてやって来たことを歌う歌としては、

あぜといへかさ寝に逢はなくにま日暮れて夕なは来なに明けぬしだ来る(⑭三四六一)

を見出すことができるが、東歌の例であり、相聞歌一般に広げることとはできない。男が「過ぎて来」ることを非難し、不満に思う発想は、相聞歌に一般的な発想とは言えないのである。この点については、七夕歌の表現のあり方全体についての考察が必要となる。

七夕伝説は中国伝来の伝説であり、人麻呂歌集七夕歌は、その外来の伝説を和歌において詠む最初の試みであった。和歌世界に馴染みのない伝説をどのように歌に詠むか。和歌としての表現の蓄積、伝統を全く持たない素材を歌に詠むに際して、人麻呂歌集七夕歌が表現のベースとして選択したのは、相聞歌の表現であった。それは七夕伝説が一年に一度しか逢えない牽牛と織女の悲恋伝説であるから当然と言えは当然のことであった。そのため人麻呂歌集七夕歌には、七月七日以外の時に逢えぬ嘆きを歌う歌を比較的多く見られるのである。

しかし、七夕伝説はやはり地上の男女の恋とは大きく異なる天上の悲恋伝説としての要素を持っており、相聞歌の表現のみでは、その特異さを表すことができない。そこで相聞歌一般とは異なる表現の工夫が随所に見られることとなる。その一端については、以前に拙稿「人麻呂歌集七夕歌考——非現実表現と〈ひとり〉の抒情——」で論じたので併読を乞うが、「安の渡りに」(⑩二〇〇〇)、「安の川原に」(⑩二〇三三)に見られる、天の川を古事記等の神話の「安の河」と重ねる表現や、「八千杵の神の御世より」(⑩二〇〇二)、「天地と別れし時ゆ」(⑩二〇〇五)、「神世し恨

めし」(⑩二〇〇七)など、牽牛と織女の悲恋を神話的な時代以来のものとする表現は、人麻呂歌集七夕歌——人麻呂歌集七夕歌は、一首を除いて非略体歌に属する——の詠まれた時代(天武朝から持統朝頃)に一方で形成されていたであろう古事記・日本書紀の神話の表現によって、現実の恋とは異なる天上の恋を表現しようとする試みであった。また、「天の川水さへに照る船」(⑩一九九六)と牽牛の船を地上には見られないような絢爛たる船として表現し、「白玉の五百つ集ひを解きもみず」(⑩二〇二二)と、織女を真珠五百個を連ねた——「五百つ」は数の多いことを言う——装飾で飾るのも、天上の悲恋伝説を歌うための工夫と見られる。その他、織女を「あからひく色ぐはし子」(⑩一九九九)、「彼方人」と呼ぶ特異な表現にも、それは見られる。

一九九八番歌の「過ぎて来」に話を戻すと、一般の相聞歌においては、女の立場で男が長い間訪ねて来ないことを嘆く歌は多数見られるが、特定の日に限定して男が来るべき時を過ぎて来ること、つまり遅れて来ることを嘆く歌は見られない。それは、時間を指定して待ち合わせをするような現代の男女とは異なる古代の恋愛事情から見て自然なことである。そうした中で、万葉集の七夕歌には、先に示したように牽牛が来るべき時に来ないこと、牽牛の船がなかなか船出しないことなどを歌う歌がしばしば見られる。こうした表現は、今夜逢えなくても明日に逢える可能性が幾分なりとも存する地上の恋では現れにくい発想なのだろう。一年に一度、七夕の夜にしか逢えないがゆえに、来るべき時を過ぎてても牽牛が訪れないことを嘆くという発想・表現が成り立つのである。

相聞歌一般の表現から見ると特異に見える「過ぎて来べしや」という表現も、人麻呂歌集七夕歌が選択した「七夕表現」と見るべきであろう。

## 六 まとめ

近年の注釈書において、牽牛の船が通過してしまうことを嘆く歌としての解釈が通説化しつつある一九九八番歌について、「過ぎて来」という表現の検討から、『古義』、佐佐木『評釈』が提示していた、牽牛が遅れて来ることを嘆くとする理解が最も適当であることを述べてきた。

一九九八番歌をそのように解したとき、「過ぎて来べしや」という表現は、一年に七夕の夜にしか逢うことを許されない織女の心を表現する、人麻呂歌集七夕歌の「七夕表現」と言えるであろう。

### 注

- (1) ツマについては、牽牛を指すか織女を指すか、揺れが存するため、今は原文の文字「孀」を当てておく。
- (2) 拙稿「人麻呂歌集七夕歌考——非現実表現と〈ひとり〉の抒情——」（『国語と国文学』第七三卷八号、一九九六・八）。
- (3) 渡瀬昌忠「人麻呂歌集略体歌の七夕歌——使者を求めて——」（松田好夫先生追悼論文集『万葉学論攷』続群書類従完成会、一九九〇）、同「人麻呂歌集と漢文学——七夕歌の月の使者——」（和漢比較文学叢書9『万葉集と漢文学』（汲古書院、一九九三）、同「人麻呂歌集七夕歌群の月人壮士」（青木生子博士頌寿記念論集『上代文学の諸相』塙書房、一九九三）など。渡瀬昌忠著作集 第四卷『人麻呂歌集非略体歌論下——七夕歌群論——』（おうふう、二〇〇二）に一括して収載されている。
- (4) 品田悦一「人麻呂作品における主体の獲得」（『国語と国文学』68巻5号、一九九三・五）。

- (5) たとえば『注釈』は「鳴いて行つてゐることであらうか」と訳している。
- (6) 渡瀬昌忠著作集 第四卷『人麻呂歌集非略体歌論下—七夕歌群論—』(おうふう、二〇〇二)、第三節「第二歌群の論」。
- (7) 稲岡耕二「人麻呂歌集七夕歌の性格」(『万葉集研究』第八集、塙書房、一九七九)、抽稿「万葉七夕歌と七夕語彙—タナバタツメ・ヒコホシの形成と定着—」(『上代文学』第七三号、一九九四・一一)など。
- (8) 抽稿「七夕歌意識の変遷と七夕歌の定着」(『中京大学上代文学論究』一一号、二〇〇三・三)、村田右富実『柿本人麻呂と和歌史』(和泉書院、二〇〇四)第三章第一節「初期七夕歌」。
- (9) 注2に同じ。